消防団員として地域の消防活動に尽力 篠﨑耕太郎さんに「瑞宝双光章」

7月4日に伝達された勲章と記念撮影をする篠﨑さん

4月29日に令和4年春の叙勲受章者が発表され、内子町から篠﨑耕太郎さんが「瑞宝双光章」を受章しました。

篠﨑さんは平成30年に消防団長に就任。西日本豪雨災害で指揮を執るなど、減災・防災活動に務めました。内子町消防団には昭和53年に入団。42年間という長きにわたり消防団活動に貢献した功績が認められました。

篠﨑さんは「西日本豪雨災害では延べ1046人の団員が出動した。幸いにも人的被害はなかったが、改めて災害に対しての備えと団員の命を守ることの大切さを感じた。受賞は自分の力だけでできるものではない。いい巡り合わせ、いい出会い、いい教えのおかげ。皆さんの協力で重責を果たすことができた」と感謝の気持ちを述べました。

「役場ってどんなところ?」 天神小学校の児童が職場見学

天神小学校2年生34人が6月28日、校外学習として校区内にある内子町役場を訪れました。

児童たちは2班に分かれて町長室や総務課、住民課などを回り、職場内を見学。職員に質問をして役場の仕事に理解を深めていました。町長室では小野植正久町長が、「町のルールやお金の使い方を決めている。みんなの幸せのために頑張るのが町長の仕事」と説明。児童からは「ここで寝るのですか」「じゃばらの商品をなんで置いているのですか」など、かわいらしい質問が寄せられていました。

手を挙げて次々と小野植町長に質問する児童たち

長袖の体操服を着た状態で、水に浮く練習をする生徒たち

水辺のもしもに備えて 小田中学校で「ういてまて教室」

水の事故から身を守る方法を学ぶ「ういてまて教室」が7月8日、小田中学校で行われ、全校生徒23人が参加。服を着たまま泳ぐ「着衣泳」などを消防署員から学びました。

教室では正しい入水の仕方や、水の中での歩き方などのほか、服を着て溺れそうになったときは、泳ぐのではなく「浮いて呼吸を確保すること」などを実践しました。

消防署員の岩田康宏さんは「浮いているときは体の2%しか水の上に出ないので、鼻と口だけを出すということを意識して」と教えていました。

子どもを守る「こども手帳」 日本公衆電話会が町に寄贈

子どもたちの安全と安心を守りたいと、日本公衆電話会から内子町に「こども手帳」が寄贈され、7月7日に教育長室で寄贈式が行われました。

式には同会愛媛支部長の藤岡敏明さんが出席し、林純司教育長に同手帳430冊の目録を手渡しました。手帳には公衆電話のかけ方や交通標識の意味など、普段の生活から災害時まで、自分の身を守るために大切なことが、分かりやすくまとめられています。林教育長は「大人も学べる。ぜひ家族で見て活用してほしい」と話しました。

こども手帳と目録を手にする林教育長（右）と藤岡支部長

名人が伝統の技を伝授 凧博物館の「ものづくり体験」

凧作りに挑戦する参加者。下書きから5時間かけて描いた力作

地元産の和紙と竹を使う「ものづくり体験」が7月23日、五十崎凧博物館で開かれました。17人が参加し、うちわや凧作りに挑戦。うちわは好きな色や模様の和紙を選び、竹で作った骨に貼り付け、凧はあらかじめ作られた白凧に凧文字を描きます。参加者は素材の良さを生かし、思い思いに制作を楽しんでいました。

今回で3回目の凧作りという武内優平さん（内子小6年）は「初めて3文字の凧に挑戦した。バランスをとるのが難しかったけれど、上手に描けた」と笑顔で話しました。

町並みの「いま」と「これから」を共有 40周年を迎えて次のステップへ――

「内子八日市護国※重伝建選定40周年記念事業」が7月23・24の両日、内子座などで開かれました。全国町並み保存連盟中四国ブロックゼミもかねており、県内外から約60人の関係者が参加。空き家や住民の高齢化など、町並みを保存・活用するための課題や対応策について意見を交わしました。

重伝建に選定された昭和57年以前の八日市護国地区で撮影された映画、「坊っちゃん」の上映がされたほか、伝建地区の今とこれからをテーマとした文化庁主任文化財調査官・梅津章子さんの講演、広島県福山市鞆町などの活動報告がありました。

同事業実行委員長の芳我明彦さんは「町並み保存の新しい課題に正面から向き合い、より住みやすい町並みを目指す」と決意を新たにしました。

（上）八日市護国地区の保存活動を報告する芳我さん　（下）記念事業の一環で「まち歩き」も行われた

※重伝建＝重要伝統的建造物群保存地区の略称